



【降誕を迎える神の人たちの姿勢(3) -羊飼い(3)】

聖書本文:ルカの福音書2章15-20節/ 暗唱聖句;ルカの福音書2章20節

ジョンナムテョル
 説教者:鄭南哲牧師

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん! 早いものの来週は、いよいよ降誕の主日と同時に、2011年最後の主日を迎えます。今日洗礼を受ける後藤友美姉妹も心からお祝い申し上げます。ずいぶん前から、イエス様を信じ、信仰の生活をしてきて、神様の時に洗礼を受ける事になりました。これからクリスチャンとして、もっと神様を愛し、家族に伝え、主の教会のために仕えていくのにさらなる祝福と信仰が増し加わりますように主イエスキリストの御名によって祝福し、お祈り申し上げます。

来週は今年最後の主日をクリスマス集会として、人々を招いてこの地に来られたイエス様の愛を分かち合えることがどれだけ感謝なのかわかりません。2011年最後の主日を迎える前の今日、我々は降誕をどのように迎えるべきでしょうか。いままでマリヤをとおして、ヨセフをとおして降誕を迎える姿勢について学んできました。

今日は最後に、みどりごイエス様が生まれた当時、降誕を迎える羊飼いの姿勢を調べたいと思います。信仰の家族のみなさん! 羊飼いという言葉からみなさんは何を感じますか。‘羊を飼う羊飼い’とすると安息とローマンチックで、牧歌的(ぼっかてき)な風景が思い浮かんできます。しかし、イエス様の当時、パレスティンの羊飼いらの生活はそんなに平坦な生活ではありませんでした。彼らは庶民でしたが、実際は経済的に苦しい、貧しい生活をしていたことをその当時の社会的状況を通して知ることができます。人々にはあまり認められなかった羊飼いたちに降誕の知らせが伝えられたことと、彼らがその神様を迎えたと言うことはまさしく、驚くべき出来事に間違いないと思います。

教会に長らく出席されている方々は大体羊飼いたちの話なら知っていると思います。そういうわけで、我々は羊飼いたちが主を迎えたという出来事にあまり気にしてないような気がします。よく知られている今日の本文をもう一度考えながら、羊飼いたちがどんな心構えで降誕を迎えたのか黙想する時間になったらと思います。私は個人的に降誕に出てくるいろんな人々の中で、一番信仰によって降誕を迎えた人々は羊飼いたちだったと思います。そして、彼らの信仰を表してくれる本文が今日の聖書の箇所だと思います。

1.羊飼いたちの信仰

今日の本文15節をみてください。“御使いたちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは互いに話し合った。「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう。」”

本文で御使いたちはみどりごイエスの誕生を知らせるメッセージを残して羊飼いたちを離れて天に帰りました。11節をみてください。“きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそキリストです。”

そして13,14節をみてください。

“すると、たちまち、その御使いと一緒に、多くの天の軍勢が現われて、神を賛美して言った。「いと高き所に、栄光が、神にあるように。地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように。」”

愛する信仰の家族のみなさん! クリスマスシーズンになると、よくよく聞いている聖書の箇所の一つは“いと高き所に、栄光が、地の上に、平和が”だと思います。ある人々はこの箇所を持ってきて言いがかりをつけます。“この地に、平和があるようにと言われたのにどうして平和がおとずれないのですか。”しかし、今日の聖書本文は漠然といと高き所に、栄光が、地には平和があるようにと言っていません。14節の御言葉を正確に引用すると、“神様に栄光が、地には御心にかなう人々に平和があるように”です。つまり、信仰によって主に留まっている人々に平和があるようにという意味であって、ただ、地に平和があるようにという話ではありません。もしかすると主が再び来られる日まで戦争と争いは絶え続けるかも知れません。

なぜですか? 平和に対する人々の期待にもかかわらず、人々は腐敗した罪の性質を捨てることができず、自分の欲と自分勝手に生きる限り、この地に戦争は続けるでしょう。しかし、戦争と果てしない争いの真ん中でも味わえる平安、これこそ神様を信じる者たちに約束された平安なのです。“地の上に、平和が、御心にかなう人々にあるように”

クリスマスの季節に、神様を愛し、イエスキリストを信じるみなさんの家庭と主の教会の上に、天からの平和がおとずれる祝福された降誕を迎えますように主の御名によって祝福します。アーメン!

2000年前、ダビデの町にイエスキリストが来られ、その方によって神様には栄光が、地の上には御心にかなう人々に平和がおとずれました。実際、御使いたちがこのすばらしいお知らせを伝えましたが、羊飼いたちが信じなかったら、それで終わったかもしれません。神様であるイエスキリストがこの地に人間の姿で来られた!という降誕のメッセージは二千年の間、言い伝えられてきていますが、いまだに、多くの人々はこのメッセージを信じないまま生きている人々が多くいます。

ここで、我々が一つ覚えるべきことがあります。みなさん、神様の御言葉を伝える説教が大切でもありますが、それよりもっと大切なのは説教が終わった後、人々に伝えられた神様からのメッセージにどのような反応を表すかです。

つまり、説教を聞いたという事実が大切ではなく、説教をとおして、自分に与えられた神様の御言葉に自分がどのように反応

するのかがもっと大切であるということです。

今日の本文に戻ってみると、御使いをとおして救い主の降誕のメッセージが伝えられました。羊飼いたちはこのメッセージを聞き流すこともでき、一晩の夢のように無視することもできる状況でした。しかし、15節にこう書かれています。

“御使いたちが彼らを離れて天に帰ったとき、羊飼いたちは互いに話し合った。「さあ、ベツレヘムに行って、主が私たちに知らせてくださったこの出来事を見て来よう。」”

これは何を意味しますか。羊飼いたちは自分たちに知らされたメッセージを信じたという話です。まだ、彼らは自分たちの目でみどりごイエスが生まれたことを見ていません。彼らはただ、聞いたメッセージを信じて、そのめっせーじの主人公に会うために行こうとしているのです。ここに羊飼いたちの信仰があります。

“信仰は聞くことから始まり、聞くことは、キリストについてのみことばによるのです。”(ローマ10:17) そうです。信仰はいつも聞くことから始まります。自分に与えられた神様の御言葉の前で、自分はどうのように反応するのか。まだ自分の目で確認できた状況ではなくても、自分に与えられた神様の御言葉にもとづいて、神様が我々になされるそのくすしい御業を信じれるのか。このようなことによって我々は自分の信仰を測ることができます。そういうわけでヘブルの記者は信仰をこのように定義します。“信仰は望んでいる事がらを保障し、目に見えないものを確信させるものです。(ヘブル11:1)

まだ目に見えていることではありませんが、知らされた神様の御言葉にもとづいて信じること、これがまさに信仰の出発点です。我々は15節で羊飼いたちのこの尊い信仰を見ることができます。御使いたちが現われてメッセージを伝えたとする事実より、そのメッセージを聞いて信じたという事実がもっと大切なのです。ここに羊飼いたちの信仰があります。

2. 信仰の対象に優先順位をおいた羊飼いたち

羊飼いたちは知らされたメッセージを信じただけでなく、その信仰の対象に最優先順位をおきました。16節をみてください。

“急いで行って、マリヤとヨセフと、飼葉おけに寝ておられるみどりごとを捜し当てた。”

ここで印象的な単語は“急いで行って”というところです。神様の知らせを聞いた羊飼いたちは告げられたメシヤに会いたくて急いで行ったと書かれています。しかし、メシヤなるみどりごに会うためには自分がやっていたすべてをしばらくおろさなければなりません。神様からのお言葉をきいて、救い主に対する期待を持った瞬間から羊飼いたちの生涯において一番大切な優先順位は主に直接拝見することになりました。ここで、自分たちの信仰の対象であるイエスキリストに優先順位を置いた、羊飼いたちの美しい信仰を我々は見ることができます。

我々の教会にはそのような方々がいないと信じていますが、いまの時代の人々の信仰生活の態度を見てみると、自分のやりたいことを全部やって、最後に時間があまれば‘教会に行って礼拝でもしようかな?’という考えを持っている方々が少なくない事に気付かされます。そして、自分のためにお金を使って残ったら、“すこしは神様にあげなきゃ、人々の目もあるし、”という思いで、献金する人もいるかも知れません。我々は自分たちの優先順位を正しく立てているのか点検する必要があるかも知れません。羊飼いたちは自分たちを救ってくれる救い主が来られたことを信じました。これが事実であるなら、これほど驚く出来事があるのでしょうか。一刻(いっこく)も滞(とどこお)ることができませんでした。その方に拝見するために彼らはすべてのことをしばらく後にするしかありませんでした。彼らは寝ておられるみどりごイエスキリストに拝見することができました。

ところが、みなさん! 羊飼いたちが行ってみたら、普通の旅館でもなくなんと馬小屋(うまごや)の飼葉(かいば)おけではありませんか。彼らはとつてもかかりしたかも知れません。しかし、聖書の本文にはどこも羊飼いたちがかかりしたと書かれていません。これをとおして、羊飼いたちはすでに信仰の目を持っていたと推し量ることができます。

目に見えることによってすべてを判断する、そしてそのような価値観をもっている人であるなら、“まさか、これがメシヤであるわけがない”と思ったかも知れません。しかし、神様からのメッセージを聞いた以上、神様のお言葉どおりに生まれたそのメシヤを自分のメシヤとして受け入れ、信じるその信仰の目がこの羊飼いたちにあったということはどうだか尊く感じれるのかわかりません。第二コリント5章7節をとおして信仰の本質についても一度確認してみたいと思います。

“確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。”

この短い箇所から信仰生活の本質とはなにかよく説明してくださっています。クリスチャンは日々、何によって生きていますか。目に見えるものではなく信仰です。今年、降誕の季節に我々の信仰をもう一度、新たにし、その信仰を堅く信じ、抱いて行く我々となりますように主の御名によって祝福します。

3. 信仰を伝える羊飼いたち

羊飼いたちは知らせを信じ、これからはその信仰を伝えます。17節をみてください。

“それを見たとき、羊飼いたちは、この幼子について告げられたことを知らせた。”

ほかの人々に彼らが見て、聞いたことを伝え始めます。ですから、もしかすると羊飼いたちこそ降誕のメッセージに対する最初の伝道者かも知れません。羊飼いたちが御使いからの知らせを伝えた時、人々の二つの反応がありました。

始めに、18節をみてください。“それを聞いた人たちはみな、羊飼いの話したことに驚いた。”

ここで聞いた人たちは一般的な聴衆たちを指しています。そして“驚いた”という言葉は、羊飼いたちが伝えたメッセージを聞いてからただ不思議に思っただけの反応です。聖書の原語によるとこの文章の動詞が否定過去形(ひていかこけい)、ただ一度感じたということです。これは好奇心とも言えます。それ以上はありません。これはその当時、羊飼いたちから降誕のメッセージを聞いた大体の人々の反応でした。まるで、今日多くの人々が神様の御言葉を聞くと、感動を受けるか、共感(きよ

うかん)はしますが、そこで終わってしまうのと同じです。しかし、それは御言葉に対するまことの反応ではありません。

二つ目に、19節で、マリヤの反応をみてください。“しかしマリヤは、これらのことをすべて心に納めて、思いを巡らしていた。” BUT(しかし)という言葉が含まれています。つまり、多くの人々は羊飼いたちから聞いて驚いただけでしたが、マリヤは羊飼いたちが伝えた神様の言葉と出来事を聞いて心に納め、ずっとその思いを守っていました。(巡らす-未完了形) ある人々は御言葉を聞いた後、“とってもすばらしいお話だったわ”と言って、また忘れます。それで終るのです。しかし、マリヤは羊飼いたちをとおして伝えられた救い主イエスキリストに対するメッセージをずっと心に納めました。そして続けて思い巡らしていたとしました。つまり、じっくりかみくだいて考え続けるという意味です。このような態度は御言葉をいただく事においてもとっても大切です。我々はここでもう一度マリヤの信仰を知ることができます。

19節の御言葉をただ見のがさないでください。“心に納めて、思い巡らしていた”はとっても大切な箇所です。キリストに対するお言葉を心にとめて、考えていたマリヤにそのメッセージは祝福となりました。降誕を迎える私とみなさんの心と思いは何で満ちていますか。この降誕の季節にもう一度人々の言葉ではなく、神様の御言葉で、我々の心と思いを満たして行きますようにお祈り申し上げます。

大切なのは、羊飼いたちは自分たちの信仰を持っていただけではなく、伝え始めたということです。最初の降誕の福音伝道者たちは羊飼いたちでした。そして20節に自分たちが聞いて、見たことが全部、御使いたちの言われたとおりであることをみて、神様をあがめ、賛美しながら帰っていたと書かれています。メッセージを終らせます。

今日の本文で羊飼いたちは 15節、人類を救う救い主が来られたという偉大な事実を信じ、16節、信仰の対象に一番の優先を置き、17節、その信仰を伝え始めました。そして、最後に彼らは信仰の対象である神様に賛美を持って栄光をささげました。羊飼いたちに告げられた、この救いのメッセージは今日みなさんと私にも知らされました。今回のクリスマスに、我々もこの地に来られたイエスキリストの愛と救いを伝え、その方に向って、喜びをもって賛美と感謝をささげる祝福された時を迎えられる愛するクリスチャンプレイズチャーチ信仰の家族みんなとなりますように主イエスキリストの御名によって祝福します。
アーメン!